JCS/TAWC 受賞者の学会参加報告（AHA2020/ESC2020）

ESC2020 への参加を振り返って

筑波大学循環器内科／さいたま市立病院循環器内科　中澤直美（なかざわなおみ）

ESC 2020は昨今の状況を鑑み Virtual congress となり，現地に赴く夢は叶わなかったが，後日に第 8 回 Travel Award for Women Cardiologist（JCS/TAWC）を受賞できたことは僥倖であった．選考員の先生はじめ，ご指導いただいた恩師にこの場をお借りして御礼申し上げ，参加の成果を報告する．

私は2017年から筑波大学で心室伝導障害と心機能をメインテーマに研究を始めた．心室伝導障害の中でも右脚ブロックを中心として，心エコー図や心臓 MRI を用いた臨床研究，また茨城県下のコホートデータを用いた疫学研究をまとめた．ESC 2020では後者の疫学研究についてポスター発表を行った．

Research Methodology ePosters session で“Revisiting the Significance of Right Bundle Branch Block”と題したポスター発表を行った．これまで，無症候者においては，右脚ブロックは良性所見と考えられてきたが，近年，無症候者における右脚ブロックと心血管死亡リスク増加との関連が報告されている．しかし，既報では症例数に限界があり，検討は未だ不十分である．茨城県健康研究（Ibaraki Prefectural Health Study: IPHS）は，基本健康診査受診者を対象に，その後の健診結果や生命予後を追跡し，健診成績と生活習慣病の発症や死亡との関連を検討することにより，地域の健康管理上重要な要因を明らかにし，事後指導，健康教育を効果的に進めるために企画されたコホート研究である．今回われわれは，一般住民における完全右脚ブロックと心血管死亡との関連を明らかにするため，約 9 万人の基本健康診査受診者を含む大規模データベースを解析した．その結果，完全右脚ブロックは一般住民において，心血管死亡のリスク増加と関連し，特に65歳未満の若い女性と65歳以上の高齢男性で関連した．その病態については本研究からは明らかにできていないが，右脚ブロック例のその後の心疾患や不整脈発症の有無に関する経時的調査など今後のさらなる調査を行い，右脚ブロックの予後規定因子としての意義を明らかにできればと考えている．

今回は WEB 開催であったため，口頭での発表や質疑応答の機会がなかったことは残念であった．代替というわけではないが，2021年 5 月現在，査読者と discussion を行っている最中である．

AHA 2014は私が循環器科医 1 年目のときに初めて参加した海外学会である．そのスケールの大きさや熱気は今でも非常に強く印象に残り，講演の半分も理解できていなかった私であるが，最新の知見や，新しいガイドラインの作成される過程を垣間見ることができ感銘を受けた．いつか自分もこのような場で発表してみたいと思い，帰国後にモチベーションが上がったことを思い出す．もちろん海外学会の目的の 1 つに現地の空気を味わい，食事を含めた文化に触れることが目的の 1 つでもある．であるからこそ，今回の ESC 2020の WEB 開催は正直残念であることは否めない．ただし，昨今の状況を考えると，しばらくはこの形態が続くものと思われる．今回，女性医師の立場から論じるにあたり，この状況は chance でもあると考える．私自身，今現在は研究に重心を置く

環境にいることができたが，妊娠・出産などのライフイベントで今後ライフワークバランスの見直しを再考する時期も来るだろう．その際にWEB開催のように時間や場所の制限なく参加できることで，多くの演題を聞くことができ，知識のアップデートが可能になる．願わくば，COVID-19が収束し，そのときの自身の状況下で参加形式を選択できるようなハイブリッドなESCに再度参加できるよう，研鑽を続けていきたい．

著者のCOI（conflicts of interest）開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし

＊　＊　＊